



ふくしま多文化シンポジウムと 子どもフォーラムを開催

●シンポジウム2018



5月12日午前、東日本大震災から8年目を迎えた福島県郡山市で、「韓国の≪多文化≫から福島の≪多文化≫を考える」と題して、第1回目の「ふくしま多文化共生シンポジウム」を開催した。主催は、ふくしま多文化共生研究会。韓国で暮らす移住女性団体の代表者ら4人を招いたシンポジウムは、次のように進められた。

◇基調講演：許吳英淑さん（ホオ・ヨンスク／韓国移住女性人権センター代表）「韓国の多文化政策と移住女性運動の現在」

◇韓国に住む移住女性たちの声……瀧由加利さん（たき・ゆかり／ソウル地域出入国移民者ネットワーク会長）、安順花さん（アン・スンファ／センガクナムBBセンター代表）、馬上弘子さん（もうえ・ひろこ／ドキュメンタリー映画監督）

◇みんなで話そう「私たちがのぞむ多文化社会」＜ファシリテーター＞李善姫さん（イ・ソンヒ／東北大学東北アジア研究センター・学術研究員）

関西や東京から駆け付けてくれた研究者もいて、参加者たち（県内25人・県外15人）によって、活発な議論がなされた。内容については次号で報告するが、韓国の

具体的な事例から、福島および日本の政策的課題、移住女性のエンパワーメントを考えていく契機になったと言えるだろう。

●子どもフォーラム2018

同日午後、福島県・宮城県・山形県・新潟県の子どもたち49人が集まった。郡山「幸福」、いわき「心ノ橋」、須賀川「つばさ」、仙台「瀛華中文学校」「宮城華僑華人女性联谊会中国語キッズサロン」「ハングル学校宮城」、山形「ムグンハ学校」、上越「上越中文教室」、計8教室の子どもたちである。そのほとんどが外国人のお母さん／日本人のお父さんの「ダブルの子」であり、お母さんの母語＝継承語を月2～3回、お母さんや留学生から学んでいる。各教室とも、移住女性のお母さんたちが自力で運営している。

「出会う、つながる、カラフルふくしま」を今年のテーマにした「第3回子ども多文化フォーラム」の第一部では、子どもたちが舞台の上で、中国語あるいは韓国語で歌い、踊り、詩を朗読してくれた。日ごろ保育園や学校では孤立しがちな子どもたちが、生き生きと「二つの文化」を表現してくれるその姿に、100人を超える観客の大人たちから、熱いまなざしと大きな拍手が送られた。

そして第二部では、「外国にルーツを持つ青年たちによるメッセージ」と題して、高校生・大学生・青年4人によるリレートーク。

次いで、午前中のシンポジウムに参加してくれた映画監督：馬上弘子さんの作品「初めのように：ジャングルの森を超えていこう」を上演した。これは、韓国に暮らす移住女性たちを描いたドキュメンタリー作品である。

そして最後に、第一部に出演してくれた子どもたちを

中心に、「きらきら星」を日本語・中国語・韓国語で、みんなで合唱して終了した。

フォーラムの主催は県内のEIWAN・つばさ・心ノ橋・幸福の4団体、また今回も福島県国際交流協会／福島民報社／福島民友新聞社／駐新潟中国領事館／駐仙台韓国領事館が後援してくれた。

朝7時にはバスに乗って駆けつけてくれた上越教室の子どもたちをはじめ、保育園児と小学生の子どもたちが精一杯演じてくれたことに、大きな拍手を送りたい。また第二部の青年たちも率直に自分の思いを語ってくれたことに、感謝したい。子どもたち、青年たちにとって、新たな発見と学びがあったに違いない。また、参加した大人たちの多くは、フォーラムを通して多文化の豊

かさを少しでも感得されただろう。

子どもフォーラムについては1年前から準備を始めたものの、小学校の運動会のため急きょビデオ出演となった教室があるなど、最後の1週間で全力疾走せざるをえなかった。フォーラムを無事終えて、最後に舞台上で集合写真を撮る時、子どもたちから「じいじ、だいふ疲れているんじゃないの？」とからかわれた。

これまでは「センセイ」であったのに、いつの間にか「じいじ」になってしまった。でも、多民族・多文化社会に向かうこれからの日本を担っていく、このような未来世代と、今後もさまざまなかたちで協働していきたい、と心から思った。

●佐藤信行 (EIWAN運営委員)



福島サロン2017年「お疲れ様会」



福島サロンでは、毎年12月第1日曜日の日本語能力試験が終わった後、最初の日本語サロンは、クリスマスシーズンということもあり、日本語の勉強はいったんお休みして、持ち寄りパーティーをするのがここ何年か恒例になっている。サロンにはいろいろな国の方がいるので、「クリスマス・パーティー」とは呼ばず、「日本語能力試験の受験、お疲れ様」「これまで仕事や家事をしながらの日本語の勉強、お疲れ様」という意味で「お疲れ様会」という名称を使っている。

2017年12月9日、フィリピンや韓国、中国、ベトナム、そして日本の5カ国の学習者とサポーター、16人が集まった。ふだんはなかなか会う機会のない木曜クラスと土曜クラスの参加者たちが顔を合わせる貴重な機会である。

それぞれが持ち寄った各国の伝統料理や家庭料理をテーブルに並べながら、「わー、これ何ていう料理?」「何が入っているの?」「どうやって作るの?」と、食べ物が会話のいい糸口になって、おしゃべりが弾む。

そして、食べ散らかしてしまう前にひとしきり写真撮影。それが終わるとようやくパーティーの始まり。レシピを教えてもらったり、どういう時に食べる料理なのか説明を聞いたりすることで、生きた日本語の勉強と多文化交流ができる、おいしくて楽しい一石二鳥のパーティーである。

おおいに食べておしゃべりして笑って、1年のよい締めくくりになったと思う。

●水嶋いづみ (EIWAN 運営委員)

白河サロンで2018年餅つき



2018年1月14日、白河カトリック教会を借りて今年で2回目になる餅つき。外で行なうので天候が気になったが、風は強かったものの雪は降らず天候に恵まれた。初めての餅つきの学習者が多く、最初は順番を待ちかねている様子も見られた。5回餅つきをしたので、最後は夕方になり、寒さのため2、3人で餅つきをしていたが、要領を得てとても美味しくでき上がった。でき上が

った餅は、室内で、主婦を中心に小さくちぎったり、味付けをしたりしていた。フィリピン出身学習者が、「納豆にはねぎを入れたほうが美味しい」と提案し、みんなから好評を得ていた。また、他のフィリピン出身学習者が、餅にココナッツ・パウダーを入れるアイデアを出し、日本の餅にはない新しい味を楽しんだ。

餅つきの途中で、私から、なぜ正月に餅を食べるのか、おせち料理の意味などを説明した。また、日本では、お正月や結婚式などお祝いのときに赤と白を使う、という話をした。各国のお祝いの色を聞いたところ、フィリピンでは金色、オーストラリアでは緑など、文化の違いを知ることができた。

学習者同士で「ベトナムには餅がありますか?」「何年くらい日本にいますか?」など、餅を作りながら情報交換をされていて、他国の方々と交流を持つ良い機会になったと感じた。参加者は23人。

●吉田絢子 (EIWAN運営委員)

郡山で中国家庭料理教室

「幸福」と「EIWAN」の共催で中国家庭料理教室(全3回)が郡山中央公民館で開かれた。

●一回目●2017年11月23日(勤労感謝の日)

料理名:「紅焼鯉魚(鯉の醤油煮料理)」

まずなによりも、鯉の大きさに圧倒された。スーパーで探しても、なかなかこんなに大きな魚を丸ごと一尾調理するという事は少なく、興味深い体験となった。

また、鯉の生産量全国2位が郡山市だということも、初めて知った。後で調べてみたところ、かつては1位だったが、食の欧米化や震災による養殖池の被害から生産高が減少したとのこと。このため食品会社のキリンが「鯉に恋する郡山プロジェクト」を立ち上げ、鯉料理を仙台市の牛タンや宇都宮の餃子のように郡山市の名物とする試みをおこなっているという。それでは、「紅焼鯉魚」をPRするのも、国際交流に加えて地域活性化につながって良いのではないかなと思った。

●二回目●2018年1月20日(土)

料理名:「皮から作る本格餃子(豚肉、羊肉)」

参加者で一番多かったのは「餃子という焼き餃子のイメージだから、茹でるなんて新鮮!」との声。

しかも皮から作るというのは一般家庭ではあまりない



経験なので、先生(中国人のお母さん)のお手本を見よう見まねで一先懸命作った。大きさがちょっと不揃いだったり、できあがった後、くっついてしまったりなどの小さなハプニングもあったが、皆さん楽しみながら作っていた。羊肉味のほうは好き嫌いが分かれたが、豚肉のほうは(相当な数を作ったにもかかわらず)皆さんたくさん食べていました。

日本の中華料理店ではあまり目にする事のない、満州族発祥のチャーチーマーというお菓子や、餃子が春節

(旧暦の正月)の料理だということを初めて知ったという声もあり、中国の多様な文化を知る意味で良い機会となった。

●三回目●2018年3月10日(土)

料理名:「春餅」

最初の頃は「どうコミュニケーションを取ったらいいかな?」とはにかんでいた様子の参加者の皆さんも、三回目となると、先生たちとも「フライパンだとなかなか火が通らないのよねー」「うちはこう工夫しているけれど、お宅のところはどうしているの?」と、それぞれの家庭の事情を話し合うなど、主婦同士ならではの交流が見られた。参加者の中には小さな子どももいたが、好きな具を自分で選べるのが新鮮だったのか、嬉しそうにお餅で巻いていた。そして、「(前回、前々回と多めに作

って持ち帰っていたから)パパにお土産持ってこうと思ったけど、今回は食べきっちゃった。家でまたもう一度作らなきゃね」と爆笑。

●全体を通して●

地域住民の参加者たちが、見慣れない本格的な中華料理や、水餃子と焼き餃子の文化の違いなどを、おもしろがりながら楽しんでいる様子が見られた。

福島県の皆さんは控えめな方が多いのか、初めは私にも(言葉のイントネーションで県外の者だとすぐに分かったよう)、また中国人の先生たちにも、少し遠慮がちなコミュニケーションだったのですが、だんだん打ち解けていっているように見えた。今後も継続できれば、地域の交流と活性化につながるのではないと思う。

●吉川春香(大学院生)

編集部から訂正と、お詫び……

◆『EIWANニュース』を創刊したのは2014年3月11日。それから、幾度か発行遅延を繰り返しながらほぼ「隔月刊」を何とか維持してきました。ところが、専従スタッフを置かなくなった2017年からは、半年休んで第18号(7月刊)、第19号(9月刊)、第20号(11月刊)となり、第21号は——2018年1月刊行のはずでした。

◆ところが、その21号は、私の校正ミスで、題字の横の号数が「第20号」、発行年月日が「2017年11月11日」となっていました。それに気づいたのは、全国の会員にニュースを発送した後でした。

◆ニュースの冒頭に「日本語ボランティアのスキルアップ研修会」報告記事があるのが第20号(2017年11月11日発行)、「ふくしま多文化共生研究会」報告記事があるのが、第21号(2018年1月11日発行)です。

◆じつは40年近く「編集者稼業」をしてきて、1年に1回くらいはこのような致命的なミスを繰り返してきましたが、今回は、子どもフォーラムに出演してくれた子どもたちに「じいじ、だいぶ疲れているんじゃないの?」と言われても仕方ないのかもしれない。

◆そして今号も、半年後の発行となってしまいました。重ねてお詫びいたします。

◆6月11日、ニュース第22号と共に、『EIWAN第一期報告書』を発行することができました。「2017年報告書」ではなく「第一期報告書」としたのは、今年4月からEIWAN第二期を5年計画で始めたからです。

◆「ニュース隔月刊行」という看板を外しますが、今後も、さまざまなプログラムの合間に、ニュースを皆さんのもとに届けていきたいと思えます。

【「じいじ」こと佐藤信行】

福島移住女性支援ネットワーク(EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東(JR福島駅西口から徒歩7分)

電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com

ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>

フェイスブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

送金先 郵便振替口座番号: 00920-0-144820

口座名称: 福島移住女性支援ネットワーク
